

説」(『大間知篤三著作集六』一九八二年)などの先行研究がある。一九七五年～一九八二年、『大間知篤三著作集』全六巻が未来社より刊行され、その第六巻には満洲に関する大間知の文章、そして妻・千代と竹田且による大間知の略年譜と著作目録が収められている。なお『民間伝承』三四―一(一九七〇年七月)は「大間知篤三先生追悼記念特集」(以下、「追悼特集」と記す)であり、関係者による回想には重要な情報が数多く含まれている。

本章では以上の先行研究と基礎資料を参考にしながら、大間知の民俗学創立期での活躍、及び満洲赴任後の活発な活動や研究を明らかにし、その中国経験の意味を検討する。

1 新人会から民俗学へ

1 大間知篤三(おおまち・とくぞう)の略歴

一九〇〇年、富山県富山市の裕福な呉服屋の次男として生まれる。父親は富山銀行頭取。

一九二三年四月、金沢の第四高等学校を卒業し、東京帝国大学文学部独文学科に入学する。

一九二四年、新人会に入会、文学創作活動も続ける。翌年より運動に専念する。

一九二六年、一年卒業を延ばして新人会幹事長となり、学連の指導にも当たる。労働農民党本部で書記を勤め、上司浅野晃の指令で日本共産党に入党する。

一九二七年末、一年志願兵として金沢歩兵第七連隊に入営する。翌年、三・一五事件で検挙され、三年間の実刑を言い渡される。

一九三一年、出所して新人会の友人であった大宅壮一の翻訳団に参加する。ドイツ小説の翻訳を出版し、結婚する。

一九三三年、民間伝承論講義に参加し、柳田の指示で婚姻習俗語彙の編纂を始める。

一九三四年、木曜会発足当初からの同人となり、三年間の山村調査に（後、一九三八年に海村調査にも）参加し、『旅と伝説』に民俗学の処女論文を発表する。

一九三五年より、大孝塾研究所（後、国民思想研究所）の研究員として日本家族制度を担当する。傍ら、柳田出張の随行、民俗学講習会での講演、『民間伝承』の編集など、民俗学の組織化に尽力する。

一九三九年二月、金沢連隊当時の上官辻政信の推薦で新京にある建国大学に赴任し、ドイツ語、後民族学を担当する。傍ら満洲各地で諸民族の調査を行う。

一九四六年、日本に引揚げる際文献と現地調査の資料を失う。日本民族学協会協議員になる。翌年から、富山高校でドイツ語を教える。

一九四八年、民俗学研究所嘱託、五〇年同代議員、五一年同理事になる。

一九五四年、結核で同所を退職、同所及び日本民俗学会と疎遠になるが、調査と研究を続ける。

一九七〇年二月、東京の自宅で病没。

大間知と多くのところで共通点を持ち、これからもしばしば登場してくる守随一の略歴も以下に併記しておく⁽¹⁾。

守随一（しゅずい、はじめ）の略歴

一九〇四年、東京市麹町の稗の家元に、長男として生れる。浦和高校在学中、寮歌「緑の丘辺」⁽²⁾を作詞する。日本エスペラント学会の会員である。

一九二五年、東京帝大経済学部に入學し、矢内原忠雄に師事した。在学中、新人会に入会する。エスペラントの翻訳や学会の評議員も務める。

一九二八年、卒業。講師として武蔵高校や頌栄高等女学校、浦和高校などで法制、経済を教える。

一九三四年、木曜会発足当初からの同人となり、三年間の山村調査に（後、一九三八年に海村調査にも）参加し、『旅と伝説』に民俗学の処女論文を発表する。

一九三五年、民俗学講習会での講演、『民間伝承』の編集など、民俗学の組織化に尽力する。一時大蔵省で外国租税制度の調査に参加する。

一九三八年十月、満鉄調査部の新京支社に赴任し、経済調査に従事する。のち支社調査室業務主任になる。

一九四三年、満鉄事件の第二次検挙により奉天で入獄する。

一九四四年一月、未決で釈放されるが、獄中で罹ったチフスにより新京の友人宅で病没。

2 新人会と民俗学

木曜会の主要メンバーの中で、新人会成員だった人物は三人いた。大間知の外に、佐々木彦一郎（一九〇一～一九三六年）³と守随一である。三人は共に一九三三年木曜会の活動が本格化した当時から関わりを持ち、山村調査に中心メンバーとして参加し、民間伝承の会が結成されてからその維持委員となった。そして各自の活動以外、佐々木は山口貞夫（一九三三年）と石田英一郎（一九三四年）、守随一は倉田一郎（一九三四年）など、のちに民俗学の有力な推進者となる人物を木曜会に紹介した功績も大きい。地理専攻の佐々木は中国と出会うことなく日中戦争前に亡くなったが、大間知と守随が共に日中戦争が勃発した後の一九三八年末から一九三九年初に満洲に赴いたことは興味深い。

新人会は初期（一九一八～一九二二年）において、H・スミスが指摘したように、全世界に広がる革命の潮流に巻き込まれる感情的な国際主義の精神が顕著であった⁴。とくに吉野作造や宮崎龍介によって、中国との絆は強かった。一九一九年に宮崎を始めとする新人会の四人が北京大学を訪問し、また新人会の招きによって、一九二〇

年五月中国学生運動の中心的な組織少年中国学会の幹部五人が訪日したこともあった⁽⁵⁾。しかし吉野の影響の後退や宮崎の卒業などにより、「ナロード宣言」を経て学内団体となった新人会には、こうした国外の学生組織との交流が見られなくなった。一九二〇年代を通じて新人会はもっぱら国内問題に集中し、国際問題とくにアジアの問題に関心を持たなかった⁽⁶⁾。

大間知は四高時代から文学活動に熱心であり、新人会に入会してからも文学雑誌の編集を続けていたが、一九二五年から運動に集中するようになった。新人会の幹事長になった一九二六年は、いわゆる福本イズムの時代（一九二六―一九二八年）であり、再建共產党にすでに入党した学生運動出身者は雪だるま式に若い仲間を引き入れていた。大間知もその中で共產黨員となった⁽⁷⁾。

新人会時代が彼に与えた影響は以下の二点において大きいと思われる。一つは少人数が定期的に集まり定められた文献を読み、討論する研究会活動⁽⁸⁾であり、もう一つはこのエリート団体の組織者の一人として得られた人脈である。

木曜会の柳田宅での集会は柳田国男の指導を受ける講義の性格が強いが、その中心メンバーである大間知、佐々木、守随、杉浦健一、山口貞夫や橋浦泰雄、大藤時彦などは「成城での話題を更に掘り下げ」るために自発的な研究会を続けていた⁽⁹⁾。満洲に赴いてからも、大間知は新京民俗同好会などの自主的な研究会の活動に積極的であった。そして戦後の一九四八年から亡くなるまで彼は浅野晃、中平解、大森志郎らと「古典輪読会」を続けていたことも、徹底的に文献を理解することによって自己思想の改造⁽¹⁰⁾を図るといふ新人会時代の研究会経験と無関係ではないだろう。

後者に関して、民俗学関連だけで言えば、柳田門下入りの仲介役と思われる橋浦泰雄とは、新人会のメンバーとして『無産者新聞』編集室に赴いたとき初めて会った⁽¹¹⁾。そして木曜会の守随と佐々木以外、新人会から民間伝承の会に入会した者の中で、福間敏男（一九三五年十月『民間伝承』一―二入会。以下同様）は当時大間知と大宅壮

一翻訳団での同僚であり、中平解（同前）は大間知と同じく一九二七年に卒業した者で、生涯の友人であった。浅野晃（一九三六年四月『民間伝承』一七八）は大間知を通して柳田と面識を持ち、さらに水野成夫（一九三七年十二月二〇日『民間伝承』三一四）を柳田と引き合わせた¹²⁾。中平と浅野は戦後『民間伝承』の世話人であり、水野は一九四〇年、軍部の協力を得て大日本再生製紙会社を創立し、終戦までその重役であったことは、戦時下の用紙統制中で柳田国男を中心とする民俗学関係の出版にとって有利な条件であった。

3 民俗学創立期での活躍

大間知と柳田との出会いは鶴見太郎の指摘によると、当局による思想善導の思惑や柳田周囲にいた若干の知己という条件の下で生まれたものであったという¹³⁾。柳田との付き合いからいえば、守随一の方が古い¹⁴⁾、木曜会は大間知は守随を「新顔」¹⁵⁾と言えるほどの先輩であった。守随は一九三四年木曜会の第一回例会に、同じ高輪教会に通っていた倉田一郎を連れて参加したが、大間知は一九三三年九月に始まった民間伝承論講義の初回からの出席者の一人であったからである。しかし、その後『民間伝承』の編集や世話人の指定、乃至満洲行は、すべて守随が大間知に一歩先んじていた。

民間伝承の会が結成されてその機関誌『民間伝承』の編集発行名義人として柳田に指名されたのが守随であった。守随の親とは一高、帝大の同級生という関係で、若くして亡くなった友人の子供への気遣いがあると思われる。そして柳田と守随とともにエスペラント学会評議員であることも親近感を増す要素である。さらに実際、『民間伝承』の編集所はまた民間伝承の会の事務所も兼ねており、裕福な家庭に生まれた守随には、編集作業に集中するための環境や経済的条件がある¹⁶⁾という判断もあろう。

雑誌の編集は木曜会の同人が担当していたが、まとめ役として輪番制で一年ごとに編集責任者が決められていた。当然、編集名義人である守随は、初年度の編集責任者となった。九月発行の雑誌創刊号によれば、民間伝承の

会の最初の世話人は青森、新潟、長野、愛知、大阪、山口、熊本など地方の有力研究家以外、東京では柳田国男、岡正雄、橋浦泰雄、桜田勝徳、大藤時彦、山口貞夫と並んで守随一の名前が見られる。

表12 大間知篤三山村調査地一覧

初回調査年月	調査地	再調査年月
1934年5月20日～28日	茨城県多賀郡高岡村	同7月19日～25日、8月18日～29日
11月	広島県山県郡中野村	1935年3月
1935年6月21日～29日	岩手県九戸郡山形村	同8月11日～22日
11月	愛媛県北宇和郡御檜村	1936年2月
1936年5月	鹿児島県出水郡大川内村	同10月
1937年3月	奈良県添上郡瀬村・宇陀郡曾爾村	なし

出典：大間知千代・竹田旦「大間知篤三略年譜」(『大間知篤三著作集』6所収)より作成。

守随について編集責任者となったのが大間知であった。それに伴い『民間伝承』二一三(一九三六年十一月)に兵庫からの太田陸郎、鳥取からの蓮仏重寿と並んで、大間知も世話人として追加された。

初期民俗学において守随は『民間伝承』の編集など縁の下で努力する形をとったとすれば、大間知はまず調査研究活動においてその力を見せた。

木曜会の成立に先立って、一九三四年一月六、七日、大間知は佐々木彦一郎と一緒に千葉県白浜で初めての民俗調査を行い、その報告を『島』第二巻(四月)に投稿し、二月に伊豆神津島に赴き、その報告を『東京朝日新聞』(三月二二～二三)に投稿した¹⁷⁾。山村調査の中で大間知が行った調査(図9)を年譜によって整理すると、表12になる。

守随一も長野県更級郡信級村と京都府北桑田郡知井村を調査しているが、大間知が三年間で調査した村は実に七村にも上り、その内の五村について再調査を行い、最初の調査地である高岡村についての調査は三回で合計二八日間にもわたった。その結果は後に全国民俗誌叢書の一冊として出版された『常陸高岡村民俗誌』(刀江書院、一九五一年)に結晶した。

海村調査の中で大間知は一九三八年三月十五日～二十五日、八丈島末吉村を調査し、戦後の大著『八丈島』での研究のきっかけを作った。これ以外、大間知は自

直系親族に到るまで世代別に竈を分つて生活する隠居制が、遙かに広い範囲にわたつて分布して居ることは大きな問題であり、所謂末子相続の問題も亦是と關聯して考へられなければならない」と主張している。



図9 大間知篤三 1934 年度山村調査手帖・茨城県
 出典：福田アジオ他編『日本民俗大辞典』下、2000年、口絵より。

的に伊豆大島、神津島（一九三四年二月）、岐阜県大野郡白川村（一九三五年五月）、甌島（一九三六年五月）についても調査を行った。

大間知は木曜会の会合でこれら調査の結果を数多く報告しており⁽¹⁸⁾、調査や表現の方法などについて同人と議論した。同じく山村調査のメンバーである最上孝敬の回想によると、当時、細かい表現方法などの討議や決定の際に大間知が進行をつかさどることが多く、大間知の報告書は「いつも精細克明に記されている最上級のものであった」⁽¹⁹⁾だけではなく、「いつも何か新しい問題の展開があった」という。対象を理論的に把握、分析する能力は、かつて大間知が学生運動の中で労農党の活動方針に関する新聞の社説を鮮やかに論評したときにも窺える。初期の木曜会では、大間知も他の同人と同じように、調査方法と研究方法においては、基本的には柳田の指導にそっていたが、山村調査の最初の調査地である高岡村（図9）は「偶然にもいわゆる隠居慣行の著しく濃厚な地であった」⁽²⁰⁾こともあり、隠居など後に大きく自分の研究の基礎をなす民俗事象にも出会うことになった。

たとえば彼は『民間伝承』一―二（一九三六年八月）に「隠居」という一文を寄稿し、「日本の家族制度を考察する場合に、傍系親族をまで一家族に包容し且つ一つの竈の飯で生活する大家族が一方にあるに對して、

表13 大間知篤三日本民俗学普及活動（1938年まで）

年 月	場所	内 容
1935年8月5日	東京	日本民俗学講習会で「冠婚葬祭の話」を講演
10月28日	大阪	大阪民俗談話会主催柳田遷歴記念民俗学講演会で「民俗学ノ産屋ヨリ」を講演（西田直二郎、折口信夫、柳田国男、W.シュミットと）
1936年1月18日	大阪	大阪民俗談話会に出席し、大阪連続民俗学講習会の計画に関して協議（橋浦泰雄と柳田に同行）
4月末	長崎	長崎郷土振興会講習会で「村落と協同生活」を講演。（柳田も講演、杉浦健一と現地参加）
5月9日	京都	京大民俗学会で甕島の家族・婚姻習俗を話す
9月26日	大阪	大阪25回連続講習会で「民俗採集技能と採集者」を講演
1937年3月2、9日	東京	第1期日本民俗学講座第7、8回として「婚姻と家庭」を講演
3月29、30日	愛知	愛知県教育会と民間伝承の会共催の講習会で「村の交際」を講演（折口と）
4月5日	奈良	奈良市加藤玄智博士歓迎講演会で「同齡感覚」を講演（沢田四郎作、野村伝四と）
5月15日	金沢	金沢民俗談話会に出席（大藤時彦と）
5月18日	岐阜	飛騨考古土俗学会の会員との座談会に出席
10月5日	東京	第3期日本民俗学講座で「墓制」を講演
1938年2月15、22日	東京	第4期日本民俗学講座で「産育の民俗」を講演
12月13日、20日	東京	第6期日本民俗学講座で「家族制度に於ける二三の問題」を講演

出典：大間知千代・竹田旦「大間知篤三略年譜」（『大間知篤三著作集』6所収）より作成。

大間知は『民間伝承』に自分の調査についての会員通信を寄せる他、

新刊の紹介書評^①や欧米とりわけドイツの民俗学の紹介^②にも積極的であった。また流行にも敏感であった。日中戦争が始まってまもなく、彼は『東京日々新聞』（八月二七日朝刊）に事変下の街頭風景である千人針のことについて分析を試みている。それが『民間伝承』三一一（一九三七年九月）の編集雑記に紹介され、その後の戦争に関係する民俗への注目に影響を与えた。

大間知は研究者であると同時に、また運動家でもあった。彼は一九三五年の日本民俗学講習会から満洲行きの直前まで、各地で行われる民俗学講座、講習会や民俗学関係団体の活動に積極的に関与し、持ち前の組織的な活動力を遺憾なく発揮していた（表13参照）。

大間知の研究や組織活動は基本的に民俗学の範囲内にあったが、同時に『東京人類学会・日本民族学会聯合大会第一回

紀事』(一九三六年十一月)によると、四月初めに行われる同大会に、大間知は日本民族学会の会員として参加していた⁽²³⁾。さらに一九三八年四月に「『隠居』について」を『年報社会学』(第五輯)に投稿している。大間知は民族学、社会学とも積極的に接点を持っていたことがわかる。

2 「満洲」での調査

1 満鉄そして建国大学

日中戦争に入ってから、外国理論の吸収、関連学問の成果への留意を含め、『民間伝承』誌上は活況を呈していた。発刊四年目に入った四一(一九三八年九月)の編輯後記には以下の内容が載せられた。

事務所も本会創立以来犠牲的に引き受けてゐられた守随氏の処から左記別項へ移転しました。この三ケ年にあたる永い間の同氏の並々ならぬ苦勞と御尽力とに対して会員諸氏と共に茲に深甚なる感謝の意を表したいと思ひます。

抑制の筆触で書かれたこの簡単な知らせは多くの情報を含んでおらず、当時多くの会員はさほど注意を払わなかったかもしれない。しかし会の事務所の変化は、決して個人的な理由にとどまらず、社会のより大きな変化の一部であり、またこれからの変化を暗示していた。

下って『民間伝承』四一六(一九三九年三月)では「守随一氏又昨年末急遽満鉄調査部へ転職の爲めに大連へ移り大間知篤三氏又急に新京へ聘せられて本月下旬中には出発の予定。新鋭の参加ありとは云へ残留部隊は大いに緊張を感じて居る」と報じている。その前の一九三六年に最初からのメンバーであった佐々木彦一郎は病没したし、